

報 告

在宅看護論臨地実習における訪問看護についての学びの分析

福田久子，藤咲美輝，峯小百合

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】

本研究の目的は、臨地実習後の学生のレポートから訪問看護についての学びを明らかにし、今後の実習体制の構築のための示唆を得ることである。在宅看護論実習を履修した4年生 45名の実習後レポートから、訪問看護の学びに関する文脈について分析を行った。訪問看護実習からの学びとして、《療養者への支援》《家族・介護者への支援》《療養環境の整備》《多職種連携》《訪問看護に求められる資質・能力》の5つコアカテゴリが抽出された。また、学生間のディスカッションからの学びとして、【ディスカッションを通しての多様性の理解と共有】【実習体験からの学びの共有】のカテゴリが抽出された。学生は療養者や家族・介護者と関わることで療養者の個別性やその人らしさとは何かを実感し感得できていた。また、訪問看護師から支援を受け看護援助を学ぶことやディスカッションを通しての学びを共有することで、個々の看護観の形成に繋がっていたと考えられる。

キーワード：在宅看護論実習，臨地実習，訪問看護，学生の学び

I. 序論

1. 本研究の背景

看護学実習は、学生が看護実践に必要な基礎的能力を修得するという学習目的達成を目指す授業¹⁾である。講義や演習での学びを基に個別の対象に合わせた看護の提供や看護実践の中での体験を通して、必要な知識・技術・態度を統合させていくために重要な位置づけとなる。

連絡責任者：福田久子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622

FAX: 029-826-6776

E-mail: h-fukuda@tius.ac.jp

しかも、在宅看護論実習は人々の生活の場で看護活動が展開される中での実習となるため、臨地実習での学びは貴重な体験に繋がる。

しかし、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の影響により、全国の病院・施設での実習の受け入れが困難となり、臨地実習が行えない事態が生じた。これに対し、文部科学省・厚生労働省が発出した事務連絡（2020年2月28日）²⁾を受け、本学の在宅看護論実習では2020年度の実習を学内代替実習としてオンラインによるLive実習を試みた。Live実習から得られた訪問看護の学びとして【個別性のある看護の必要性】【療養者のニーズに応じた支援】【生活環境を考慮した支援】【自己実現への関わり】【療養者との信頼関係の構築】【観察・アセスメント・技術力の重要性】【多職種連携によ

る療養生活支援】の7つのカテゴリが抽出され、臨地実習に近い学びができていた³⁾。

一方、先行研究ではオンラインでの患者との関わりが1回のみと短く患者の全体像のイメージがつきにくかった⁴⁾ことや、五感を通した学びや患者にとって適切なタイミングを配慮して援助することに限界を感じた⁵⁾とするオンライン実習の課題が報告されていた。本学のLive実習の際も療養者1名との1回のみ関わりであり、Google Meetによる見学中心の実習であった。このように、看護の対象者に接して関係性を構築した中で学ぶことは臨地実習でなければ十分にはできないことが示されており、オンラインによるLive実習から学んだ学生達も感じていたことであると考えられた。

COVID-19が5類感染症に移行したことより、4年生在宅看護論実習はオンラインによる実習から臨地実習に戻った。そこで、本研究の目的は在宅看護論実習における訪問看護についての学生の学びを明らかにすることである。学生が訪問看護師の活動を通してどの程度理解しているのか現状を明らかにし、より学習効果を向上させるためにはどのような実習体制の構築が必要か検討することは意義のあることと言える。

2. 目的

臨地実習後の学生のレポートから訪問看護についての学びを明らかにし、今後の実習体制の構築のための示唆を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

令和6年度に本学医療保健学部看護学科に在籍し在宅看護論実習を履修した4年生51名。

2. 在宅看護論実習の概要

在宅看護論実習は訪問看護ステーション、通所リハビリテーション、居宅看護支援事業所で実施している。

1) 在宅看護論実習の目的・目標

在宅看護論実習の目的は、地域で生活している療養者および家族・介護者がある人らしい生活をどのように送っているかを理解し、在宅看護のあり方を学ぶことである。実習目標は①訪問看護・通所リハビリテーション・居宅介護支援事業所の機能と役割について学ぶことができる。②療養者および家族が地域で健康の回復や維持を図りながら生活するために必要な看護援助を理解し、学生間で共有することができるとしている。

2) 実習方法

在宅看護論実習のスケジュールの概要を表1に示す。訪問看護実習4日、通所リハビリテーション実習1日、居宅介護支援事業所実習1日、学内実習の組合せとなる。1クール2週間の実習は学生2名がペアとなり1施設で実習をする。1クルールの学生数は約10名のため5施設に分かれての実習となる。学内実習では、受持ち療養者の看護過程を展開した記録に対して担当教員が個別に指導する。また、受持ち療養者からの学びをスライドにまとめ実習最終日に発表することや学生それぞれの学びについてディスカッションをすることで、他の学生の学びを共有する機会を作る。そして、受持ち以外の療養者も含めて訪問看護師に同行し援助の実際を見学し、療養者や家族・介護者、多職種との関りからの学びを課題レポートとしてまとめるとした。

3. 研究手順

研究の手続きを時系列①～⑤で示す。

表 1. 在宅看護論実習スケジュールの概要

日程		内容
1週目	月 学内オリエンテーション	・実習施設情報の説明 ・注意事項の確認 等
	訪問看護実習	・オリエンテーション ・受け持ち療養者の情報収集
	火 訪問看護実習	・訪問看護師に同行し療養者宅の訪問 ・受け持ち療養者の情報整理、看護計画立案
	水 通所リハビリテーション実習	・サービス内容の見学、利用者への支援
	木 訪問看護実習	・訪問看護師に同行し療養者宅の訪問 ・受け持ち療養者の看護計画・実施
	金 学内実習	・看護計画の見直し、実施内容の確認 ・演習
	月 居宅介護支援事業所実習	・居宅介護支援専門員の業務 ・ケアマネジメント
	火 訪問看護実習	・訪問看護師に同行し療養者宅の訪問 ・受け持ち療養者の看護計画・実施
	水 学内実習	・実習記録の整理
	木 訪問看護実習	・訪問看護師に同行し療養者宅の訪問 ・施設カンファレンス
2週目	金 学内実習	・看護過程展開の発表 ・最終カンファレンス

※ 1クール（2週間）： 2名/施設×5施設

①在宅看護論実習期間

令和6年5月13日～7月2日（2週間/クール×5クール）

②在宅看護論実習の成績評価を提出した。（8月末）

③本研究の説明を学生全体に実施した。（9月中旬）

④同意書回収期間として説明後回収ボックスを1週間設置し、研究に同意する学生が投函できるようにした。

⑤研究同意が得られた学生のデータのみとし、データは暗号化し分析を行った。

出し、意味内容を損なわないように要約し、コード化した。全てのコードの意味内容の同質性・異質性に基づいて分類、集約し、要約してサブカテゴリ、カテゴリ化し、訪問看護の学びとして中心となるものをコアカテゴリとして質的帰納的分析を行った。研究者間で数例のレポートのコード化の過程を共有した上で、それぞれの他のレポートのコード化を行った後、全レポートの全コードについて文脈を確認した。全研究者がサブカテゴリ、カテゴリ、コアカテゴリの抽出化を行った際、研究者間の討議により信頼性・妥当性の確保に努めた。

4. 分析方法

在宅看護論実習の際にまとめる「在宅看護論実習を通しての学び」に関する課題レポートのうち、訪問看護についての学びを本研究では分析データとした。レポートの記述内容について、学生が実習において体験し理解・認知・感動したことからの学び、また、学生間でのディスカッションを通し学びが共有できた文脈を抽

5. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究の趣旨、参加は自由意思であり、参加を断っても不利益が生じないこと、承諾撤回の自由と方法、データの取り扱い、匿名性の保持、研究結果の公表等について口頭と文書にて説明した。協力ができなくても授業の成績評価などには影響しないことを理解してもらうために、在宅看護論実習の成績評

価の提出後の説明であることも口頭で付け加えた。同意書への署名をもって研究協力の同意を得たものとした。

データの保管は専用のUSBを用いて、研究室の鍵付きロッカーにて保存・管理した。本研究に関して利益相反はない。本研究は、研究者所属の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 R06-15号）。

Ⅲ．結果

研究協力を依頼し同意が得られたのは45名（88.2%）であった。

訪問看護実習における学生の学びを表2に示した。分析により163のコードが抽出され、意味の類似性によって整理した結果、39サブカテゴリと14のカテゴリ、5のコアカテゴリが抽出された。また、学生間のディスカッションからの学びを表3に示した。分析により37のコードが抽出され、意味の類似性によって整理した結果、4のサブカテゴリと2のカテゴリが抽出された。

以下、本文において《》をコアカテゴリ、【】をカテゴリ、『』をサブカテゴリ、〈〉をコードとして表記する。

1. 訪問看護実習における学生の学び

学生の学びについて《療養者への支援》《家族・介護者への支援》《療養環境の整備》《多職種連携》《訪問看護に求められる資質・能力》の5つのコアカテゴリに集約された。

1) 《療養者への支援》

学生の学びは、【療養者の個別性に合わせた看護】【療養者のニーズに応じた支援】【療養者との信頼関係の構築】の3つのカテゴリから形成された。

療養者である『対象の理解』や、その人らしい生活を支えていくために『個別性を考慮した

ケア』を心がけること、そして、〈強みを活かし、療養者が望むライフスタイルへ近づける介入が大切である〉ことから、『本人の希望を叶える支援』や『自立を促す関わり』ができるように【療養者の個別性に合わせた看護】の大切さを学びに繋げていた。

そして、療養者の『ニーズの把握』が必要であること、ニーズを把握することにより『願いや想いを叶える支援』として〈療養者の生きがいややりたいことを尊重する事の大切さ〉や『本人の意向を尊重する関わり』から【療養者のニーズに応じた支援】の重要性を学んでいた。

『気持ちに寄り添う姿勢』や『安心して任せられる適切なケア』を実施することで【療養者との信頼関係の構築】ができ、療養者の個別性に合わせニーズに応じた支援につながることも学んでいた。

2) 《家族・介護者への支援》

学生の学びは、【介護負担への関わり】【家族・介護者のニーズに寄り添う支援】【家族・介護者のケアの質担保のための教育支援】の3つのカテゴリから形成された。

家族・介護者の『介護疲れや不安の把握』を行い、〈家族はちょっとした変化も不安になるため、不安に寄り添う看護の提供が大切である〉ことを体験し『療養者の状態を把握し家族・介護者と共有』することや『家族・介護者のケア継続のための支援』に繋げ【介護負担への関わり】をすることの重要性を学んでいた。

そして、『家族・介護者の思いや考えを尊重しながら解決策を提供』すること、グリーフケアに関わらせていただいたときは『療養者と死別後の家族・介護者への寄り添い』の大切さを学び、『家族・介護者もチーム医療の一員として参画していく』関わりが【家族・介護者のニーズに寄り添う支援】につながることを学ぶことができていた。

また、『家族・介護者の状況や介護力を把握する』ことや『家族・介護者への教育的関わり』をすることにより【家族・介護者のケアの質担

表 2-1. 訪問看護実習における学生の学び

コアカ テゴリ	カテゴリー	サブカテゴリ	代表コード	コー ド数
療養者への支援	療養者の個性に合わせた看護	対象の理解	疾患だけでなく、これまでの生活やどのような人生を歩んできたのか、発達段階に応じた役割をクリアできているか対象全体を理解する	4
		個性性を考慮したケア	その人の性格や個性を考慮してケアを考えたり接していくことが大切である	5
			生活背景や価値観を深く理解し、利用者・家族の心のケア、その人らしい生活を支えていく	
		本人の希望を叶える支援	強みを活かし、療養者が望むライフスタイルへ近づける介入が大切である 在宅では疾患や障害は暮らしの一部であり、その人の望む生活・暮らしを見据えた看護の視点が必要である	3
	療養者のニーズに応じた支援	自立を促す関わり	療養者の残存機能を活かす関わりやできることは自立を促し、必要時サポートする	2
		ニーズの把握	利用者のニーズを把握し、家族構成や介護力、環境を踏まえて療養者の願う、その人らしい生活が送ることができるように支援する	4
		願いや想いを叶える支援	療養者の生きがいややりたいことを尊重する事の大切さを学んだ	3
			療養者や家族の思いをかなえて日常生活を送ることができるように支援する	
		本人の意向を尊重する関わり	本人の意向を確認し納得したうえでケアを行うことが重要である 看護師は訪問者であるため、利用者の生活や環境に合わせる、自分の固定観念を変える、その人の価値観に寄り添う関わり方が重要である	5
	療養者との信頼関係の構築	気持ちに寄り添う姿勢	看護師は利用者の話が終わるまで聞く姿勢を保っていた	3
			信頼される看護師になるためには、相手の気持ちに寄り添うこと大切だと思った	
		安心して任せられる適切なケア	利用者一人ひとりの事を考えた適切な看護ケアの提供は、療養者や家族が安心して利用できることに繋がる	3
家族・介護者への支援	介護負担への関わり	介護疲れや不安の把握	介護者である家族においても介護疲れや患者の心配事、今後の不安についてアセスメントする必要がある	4
			家族の介護状況を把握し労うことは訪問看護師の役割である	
		療養者の状態を把握し家族・介護者と共有	状態を適切に評価し家族へ伝えることは、家族の不安を軽減出来ることにつながる	2
			家族はちょっとした変化も不安になるため、不安に寄り添う看護の提供が大切である	
	家族・介護者のための支援	家族・介護者のケア継続のための支援	どのようにすれば家族がケアを継続して効果的に行えるかということに焦点を当て考えることが大切	7
			介護を行っている家族の心身の健康だけでなく社会的にも健康な生活を送っていけるために、看護師としてどんな援助が必要になるか考える	
		家族・介護者の思いや考えを尊重しながら解決策を提供	その人にとって大切なことは何か家族を含め一緒に考えることはよりよい療養生活に繋がる	4
			在宅看護では、本人の意見を尊重することも重要であるが、家族の意見を踏まえた援助を考えることも重要である	
	家族・介護者のニーズに寄り添う支援	療養者と死別後の家族・介護者への寄り添い	エンゼルケアに立ち会い、家族とこれまでのことの振り返り話をするうちに、家族の顔が悲しみから笑顔に変化し「頑張ったね」との言葉も聞かれた。グリーフケアも重要な役割である	3
			グリーフケアとして悲しみを抱える家族を訪問し、実際に話を聞くことは家族が立ち直ることに繋がる	
		家族・介護者もチーム医療の一員として参画していく	訪問看護師の訪問がない日であっても、介護者の支えによって療養者が安心して生活できている	6
			家族から貴重な情報を得ることがある、家族もチーム医療の一員として含まれると実感した	
療養環境の整備	家族・介護者のケアの質担保のための教育支援	家族・介護者の状況や介護力を把握する	家族がすべて協力的とは限らず、それぞれ背景を考えながら利用者だけでなくその家族も支援していくことが求められる	3
			特に要介護度が高い患者では、家族の協力がケアの質に直結するため、家族との連携の大切さや家族への支援や教育が重要である	
		家族・介護者への教育的関わり	次の訪問までの間トラブルが起きないように処置をしたり、家族へ情報提供をして対応方法を説明したりと丁寧な対応が必要である	3
	療養環境の把握と調整	療養者を取り巻く環境の調整	療養者や家族、家の中の様子や環境を見ることは大切である	2
			相手の立場になって環境調整や援助をすることが大切である	
		地域の環境の把握と調整	地域の特性によって療養者の環境、背景にも相違があり、それぞれの環境に合わせて訪問看護師も対応していく必要がある	3
			地域的特徴といった療養者と家族だけを捉えるのではなく、大きな視野を持って受け持ちの療養環境を捉えてアセスメントし、支援することが重要である	
	生活環境に合わせた工夫	生活環境に合わせた看護の工夫	在宅では介護用具レンタルなど、金銭的にも制限がありコスト削減の工夫が必要だ	2
		在宅物品の準備と工夫	資源を利用するときには療養者や家族に確認を取り無駄にしないなど、限られた資源を大切に扱う必要がある	4

表 2-2. 訪問看護実習における学生の学び

コアカ テゴリ	カテゴリー	サブカテゴリ	代表コード	コー ド数
多 職 種 連 携	連携の方法・調整	情報共有のための伝達方法 の工夫	訪問時、家族が不在の場合の伝言や、多職種間での情報共有にノートなどを活用し、状況を 皆が共有することで、安心して在宅療養生活を送ることが可能になる	3
		多職種間で意見交換を行い 最善のサービスの調整	多職種間で目標を統一するために、連絡ノートや定期的な会議で情報共有を行い、実際にコ ミュニケーションを図りながら情報共有をすることが重要である 療養者・家族、関係職種ができるだけ集まり情報を確認し合っていき、療養者の生活を支援 していくことが必要である	3
		多職種と療養者の思いに 沿った目標の共通理解	多職種と療養者の目標を共通理解し、ノートなどを活用して利用者の状態や生活状況を共有 し把握する	5
		専門性を活かした連携	多職種と連携を図り、それぞれの専門性を活かし、情報共有を十分に行い、チームで療養者 とその家族を支えていることが大切である 伝達情報の優先順位やどの職種に伝えなければならないのかも考えながら多職種と連携し密 に関わることが求められる	6
	目標の統一			
	予測・判断・対応力		訪問看護は1人で全てを判断する必要があり、利用者によって何が危険な状態なのかを常に 考え、対応できるようにして行く	5
			訪問看護師には、観察力・対応力・今後を予測する力などが重要である	
	訪問看護に求めら れる知識・技術	制限の中で求められる看護 実践力	訪問看護師は、限られた時間と環境の中で最大限の看護援助をする 限られた訪問時間の中で、スムーズな看護技術の実施や物品の準備をすることが重要である	8
		地域包括ケアシステムの理 解	療養者の住む地域に応じた社会資源等の知識を持つことが求められる 訪問看護、病院、通所リハビリテーション、居宅介護支援、その他の施設などを分けて考え るのではなく、一つの流れとして考えることが大切だ	5
訪 問 看 護 に 求 め ら れ る 資 質 ・ 能 力	療養者の個別性・現状を理 解したアセスメント		訪問にあたり事前に計画していた看護ケアが可能か、適切か、変更が必要かをアセスメント し、優先準備も考えた対応能力が必要である その人なりの正解があるため、対象の利用者を全人的にアセスメントして個別性のある看護 を行うことが求められる	11
		療養者、家族・介護者の強 みを活かす視点をもつ	療養者や家族の強みや介護力について観察する視点を持つことが大切である 療養者の強みや弱みを評価、把握し、強みを伸ばしていく関わり方が大切である	5
		療養者、家族・介護者の生 活を支える視点をもつ	療養者の生活を支える視点で療養者の生活や家庭、生き方、考え方を重視し、広く長期的な 視点でその人の看護を考えていく 在宅では、疾患も勿論だが、その人が今後安全安楽に過ごすためにはどうすればよいか等、 「生活」に着目して看護を行う	4
		療養者の意向と介護力のバ ランスを保つ視点	療養者の意向と家族の介護力のバランスを考えていくことは重要である 利用者の状態や想いを第一優先に、どのような生活を送るかを考えることも重要だが、それ が現実的であるか家族の介護負担への影響も考え、バランスをとる必要がある	5
	訪問看護師に必要な観察・アセスメ ント力	療養者、家族・介護者の意 向を取り入れた看護計画の 立案	利用者や家族に必要な看護計画を立てケアを提供することは、利用者さんの望んだ生活を支 援していくことにつながる ただの医療行為ではなく、利用者のニーズを把握し、療養者を主体に考えた看護を展開して いくことの大切である	7
		療養者、家族・介護者の意 思を確認把握する	意思決定後でも経過とともに意思が変わることがある、また介護力も時間の経過の中で、家 族に心理変化があることを常に考えながら支援をする 本人や家族の意思を理解できるように聴き出す力が基礎として必要で、その上で意志を尊 重し、在宅という療養環境の中で最善の支援をすることが重要である	4
	意思決定支援	療養者、家族・介護者の意 思決定に対し、医療者とし ての役割をわきまえる	できる限り療養者や家族の想いも叶えて日常生活を送ることができるように支援する 訪問看護師は療養者が意思決定をする上で様々な選択肢を提供する立場であり、医療者とし ての立場をわきまえ、その中で最大限の支援を行うことが大切である	3
		コミュニケーションを通し ての情報収集能力	短い時間で円滑な看護援助を行い、コミュニケーションを通して必要な情報収集をする 在宅においては家族や療養者とのコミュニケーションを通して、思っていることや家族の介 護度は十分か、継続は可能かを判断しなければならない	2
	コミュニケーショ ン力	療養者、家族・介護者の精 神的側面を支えるコミュニ ケーション力	コミュニケーションをとる場面で、看護師が否定や訂正もせずに傾聴している姿を見て、療 養者の気持ちの表出を受け入れる姿勢で関わることは大切なことである 1人の人間として相手を尊重し、非言語的コミュニケーションを使って、患者の心理的側面 にも配慮することは重要である	5
		療養者、家族・介護者との 信頼関係を築くコミュニ ケーション	訪問時のマナーや言葉遣い、相手を知るために話を傾聴するなど、当たり前であり何気ない ことだが信頼関係を得るためにはどのような行動に移すことが大切かを学ぶことができた 療養者や家族とのコミュニケーションは、様々な何気ない会話から不安や悩みにおいても話 し合えることが信頼関係の構築に繋がっていくのだと学んだ	5
		個別性を考慮したコミュニ ケーション方法	構音障害を持つ療養者とのコミュニケーションを図る難しさを学んだ 意思疎通や発語ができない療養者とのコミュニケーションはどのようにすればよいのか学ぶ 事ができた	2

表 3. 学生間のディスカッションからの学び

カテゴリ	サブカテゴリ	代表コード	コード数
ディスカッションを通しての多様性の理解と共有	学生それぞれの意見や考え方を尊重する姿勢	ディスカッションを通して、それぞれの意見や考え方に相違があり、その分患者や家族の考えも様々である	4
		延命治療をテーマにディスカッションを行った際に、学生それぞれに意見や考え方があり、何が正しいのかわからなくなった。もし家族と療養者間でも意見の相違があったとしたら、看護師として両者の意見を傾聴し、役割としてできることは沢山あると考えた	
		最終ディスカッションでは、意思決定について話し合ったが、本人や家族のそれぞれの思いのどれを大切にするか優先順位を決めていくと必要だと感じた。看護師はそのような場面になったとき、その選択が間違いではないことを伝える必要がある	
		最終カンファレンスでは、私が受け持った利用者のことを全く知らない、他のメンバーから意見やアドバイスをもらい、さらに学びを深めることができた	
実習体験からの学びの共有	意見交換における自らの課題の発見	ディスカッションを通して、自分が疑問に思っていたことの解決に繋がりが、今後の看護師になった際の視点に繋がっていくと感じた	4
		最終カンファレンスの中で、「退院したら終わりではなく、利用者が自宅に帰ってからがスタートである」ことから、療養者に寄り添い、その生活に着目し一緒に考えることが大切であると実感した	
		意思疎通ができない療養者が看護師と家族が話をしていると覚醒し、何かを訴えようとしているのが印象的であった	
		障害のためPCや文字盤を使用しコミュニケーションを取る療養者は、すべての思いを伝えきることが体力面からも困難で、伝えたい事を心の中にしまい込んでしまうことも少なからずあると思う。在宅は療養者としっかり向き合いコミュニケーションをとる時間があるからこそ頑張って療養者の伝えたいことを理解したいと感じた	
実習体験からの学びの共有	自己の体験を言語化することでの意味付け	意思疎通できない療養者を受け持った。今まで患者や家族から「ありがとう」という言葉を頂きやりがいや達成感を感じてきたが、今回は言葉で評価できないことから、一緒に受け持った学生と試行錯誤しながら看護計画を考え実施した。偶然だったかもしれないが表情に変化が見えた時があり、言葉だけの関わりが看護ではないという事を学ぶことができた。療養者としっかり向き合い、頑張って療養者の伝えたいことを理解したい、理解できる看護師になりたい	17
		コミュニケーションでつまってしまうことが多かったのは何故かと考えると、在宅ではそこに暮らす人たちの関係性ができている住居環境に足を踏み入れていくためだと学んだ	
		学生2名で1名の療養者を受け持ち、看護診断をあげる際も計画の立案時も何度も話し合いを繰り返し看護過程を展開した。私一人では気づくことができなかった視点も多く、療養者のことをより多く捉えることができた	
		ケア中に交わす患者の生活に関する何気ない会話は新鮮で、在宅看護はありのままのその人を看するというのを学んだ	
学生の実習体験の語りからの気づきと視野の広がり	実習体験からの学びの共有	患者の想い、モチベーションを下げないケアや声かけが必要であると学び、教科書などでしか感じ取ることができなかった在宅看護の難しさや魅力など実際に感じる事ができた	12
		ターミナルケアで残される家族の心理面や、本人の死への想いをもっとくみ取っていくことが大切であると学んだ	
		看護師として病棟で働き退院支援に関わった際には、退院後の自宅での生活をしっかりと想定して関わっていく必要がある	
		介護者の方がとてもまめに介護をしてお部屋の中もその療養者さんの好きなものであふれていて、常にその方の好きな音楽が流れていて、病人特有のにおいがしない清潔な環境が保たれていた。きめ細やかな愛情ある介護を実際に見ることができた。まさに療養者、介護者にとってここが大切な居場所なのだと感じた	
学生の実習体験の語りからの気づきと視野の広がり	学生の実習体験の語りからの気づきと視野の広がり	カンファレンスにおいて、パンフレットを作成し指導に活用した発表を聞き、言葉で伝えるだけでなく高齢者に理解しやすいようにツールや説明する方法の工夫が参考になった	12
		学内での発表を通して、他の学生の受け持ち利用者が亡くなった後のエンゼルケアを一緒に行った遺族の悲しみに対する寄り添い方について学ぶことができた	
		遺族としては経験があり、看護師という立場でエンゼルケアやグリーフケアを通してどのように遺族に寄り添うのかについて興味があったためとても学びを得ることができた	
		カンファレンスでは意見交換をすることによって、訪問することによっての違和感に気づくことや家庭環境が重要であること等、新たな視点での学びを得ることができた	
学生の実習体験の語りからの気づきと視野の広がり	学生の実習体験の語りからの気づきと視野の広がり	発表を聞いて、同じような事例でも本人の希望や家族の関わり、住宅状況などの違いがあるため、それらに合わせたケアや援助に関わるのが大切である	
		学内実習にペアのメンバーとお互い口腔ケアを実施したが、口腔内の清潔を保とうと思ったことが、場合によっては「磨き足りない」「気持ち悪い」などの嫌な思いをさせてしまうことにつながることに気づいた	

保のための教育支援】が大切であることも学んでいた。

3) 《療養環境の整備》

学生の学びは、【療養環境の把握と調整】【療養環境に合わせた工夫】の2つのカテゴリから形成された。

『療養者を取り巻く環境の調整』、そして、家の中だけではなく〈地域の特性によって療養者の環境、背景にも相違があり、それぞれの環境に合わせて訪問看護師も対応していく必要がある〉と療養者が住む『地域の環境の把握と調整』をするなど【療養環境の把握と調整】の大切さを学んでいる。さらに、療養者の生活環境に合わせ限られた資源を大切に扱うなどの『在宅物品の準備と工夫』をすることも【生活環境に合わせた工夫】のためには大切なことを学びに繋げていた。

4) 《多職種連携》

学生の学びは、【連携の方法・調整】【目標の統一】の2つのカテゴリから形成された。

〈訪問時、家族が不在の場合の伝言や、多職種間での情報共有にノートなどを活用し、状況を皆が共有することで、安心して在宅療養生活を送ることが可能になる〉ため、『情報共有のための伝達方法の工夫』や『多職種間で意見交換を行い最善のサービスの調整』など療養環境の特徴に合わせた【連携の方法・調整】

の必要性を学んでいた。

さらに、『多職種と療養者の思いに沿った目標の共通理解』をし、『専門性を活かした連携』により【目標の統一】を図ることが療養者にとってより安心した生活に繋がることを学んでいた。

5) 《訪問看護に求められる資質・能力》

学生の学びは、【訪問看護に求められる知識・技術】【訪問看護に必要な観察・アセスメント力】【意思決定支援】【コミュニケーション力】の

4つのカテゴリから形成された。

〈訪問看護は1人で全てを判断する必要がある、利用者によって何が危険な状態なのかを常に考え、対応できるようにして行く〉ために『予測・判断・対応力』が求められること、〈限られた時間と環境の中で最大限の看護援助をする〉ため『制限の中で求められる看護実践力』の重要性を学んでいた。そして、『地域包括ケアシステムの理解』を踏まえて看護をすることが、【訪問看護に求められる知識・技術】として必要なことであると学んでいた。

また、『療養者の個別性・現状を理解したアセスメント』を行うことや『療養者、家族・介護者の強みを活かす視点をもつ』こと、『療養者、家族・介護者の生活を支える視点をもつ』ことの大切さを学んでいた。さらに、〈利用者の状態や想いを第一優先に、どのような生活を送るかを考えることも重要だが、それが現実的であるか家族の介護負担への影響も考え、バランスをとる必要がある〉とする『療養者の意向と介護力のバランスを保つ視点』まで学び取っていた。そして、『療養者、家族・介護者の意向を取り入れた看護計画の立案』ができるための【訪問看護に必要な観察・アセスメント力】の重要性も学ぶことができていた。

【訪問看護に求められる知識・技術】【訪問看護に必要な観察・アセスメント力】を備え、『療養者、家族・介護者の意思を確認把握する』ことや訪問看護師は療養者が意思決定できるように様々な選択肢を提供する立場であり『療養者、家族・介護者の意思決定に対し、医療者としての役割をわきまえる』ことが【意思決定支援】に繋がることを学んでいた。

そして、療養者や家族・介護者を支援していくためには『コミュニケーションを通しての情報収集能力』『療養者、家族・介護者の精神的側面を支えるコミュニケーション力』『療養者、家族・介護者との信頼関係を築くコミュニケーション』『個別性を考慮したコミュニケーション方法』が発揮できる【コミュニケーション力】が求められることも学び取っていた。

2. 学生間のディスカッションからの学び

ディスカッションにおける学生間の学びについては、【ディスカッションを通しての多様性の理解と共有】と【実習体験からの学びの共有】の2つのカテゴリから形成された。

学生間の【ディスカッションを通しての多様性の理解と共有】について、学生は終末期の意思決定に関して、時に意見が平行線をたどり〈学生それぞれに意見や考え方があり、何が正しいのかわからなくなった〉と迷いながらも互いの意見を尊重しながら、自分とは違う考え方や思いがあることを受容し『学生それぞれの意見や考え方を尊重する姿勢』を学んでいた。また、それぞれの学生には受持ち療養者、家族に対する看護実践や方法があり、その学生が何を大切に考え、行動したのかを言語化し伝えることや、反対に助言や意見を受け取るディスカッションを通し〈自分が疑問に思っていたことが意見やアドバイスをもらい解決でき、看護師として新たな視点につながった〉と自己を振りかえり、『意見交換における自らの課題の発見』まで学ぶことができていた。

【実習体験からの学びの共有】では、29のコードのほとんどが療養者や家族とのコミュニケーションに関することであった。意識障害や言語障害がある療養者との非言語的コミュニケーションの工夫などから、言語だけがコミュニケーションではないことへの気づきや療養者と意思疎通や反応が得られた達成感を語る学生もいた。これら様々な体験から感じたことや気づいたことを発表したり、レポートにしたりすることで、『自己の体験を言語化することでの意味付け』や『実習体験の語りから気づき視野の広がり』と新たな看護の視点へと繋げる学びができていた。

IV. 考察

1. 訪問看護実習における学生の学び

COVID-19の影響により3年生までの実習は学内実習やオンライン実習、臨地実習においては病院内での行動や受持ち患者との関わりに制限が加わり、十分な実習体験ができていないと推察していた。訪問看護の実習でも様々な制限があったが、今年度はほぼ通常通りの実習ができるようになった。そのため、病院実習において患者に密に関わることで、まして家族に会う機会はほとんどなかった状況の中で、療養者の生活の場である自宅へ訪問し療養者や家族・介護者と関わることでどこまで学びを得ることができるのか定かではなかった。

しかし、学生のレポートを分析してみると《療養者への支援》《家族・介護者への支援》《療養環境の整備》《多職種連携》《訪問看護に求められる資質・能力》のように様々な学びに繋げることができていた。川上ら⁶⁾は在宅看護実習レポートで言及される学習概念として、「多職種との連携」「利用者への寄り添い」「家族の介護力」「家族の不安・負担の軽減」「時間的な制約」「アセスメント」「病棟と在宅の違い」「物品資源の制約」「コミュニケーション」「ニーズ」を示しているが、今回の学生のレポートの中に全て網羅されていた。

訪問看護師の実習指導における取り組み方は、【学生が学びを得るための環境を整える】【指導する立場の者として学生に働きかける】【指導する立場の者としての心構えを持つ】ことであり、実習指導に求められる役割を担い実習環境を整えている⁷⁾。今回の実習においても、学生が学びやすい環境の中で看護実践の意味づけができたことでレポートに反映させることができたのではないかと考えられる。訪問看護師から直接指導を受けることは学生の学びにとって重要であることが示されていた。

そして、病院実習は家族とほとんど関わることはできなかった学生から、《家族・介護者へ

の支援》として【介護負担への関わり】【家族・介護者のニーズに寄り添う支援】【家族・介護者のケアの質担保のための教育支援】の3つのカテゴリがあげられた。大谷ら⁸⁾は在宅看護における学生の家族看護についての学びとして【利用者の状態を安定させることで家族の介護負担を軽減する】【家族の介護力を査定して支援を変える】【家族の考えや意思決定を尊重する】【家族特有のケア方法を尊重する】などを報告している。学生のレポートから同じ内容のコードが抽出されていることから、家族・介護者への支援に関しても十分に学んでいることが示唆された。しかも、『療養者と死別後の家族・介護者への寄り添い』として〈エンゼルケアに立ち会い、家族とこれまでのことの振り返り話をするうちに、家族の顔が悲しみから笑顔に変化し「頑張ったね」との言葉も聞かれた。グリーフケアも重要な役割である〉〈グリーフケアとして悲しみを抱える家族を訪問し、実際に話を聞くことは家族が立ち直ることに繋がる〉ことを学生自身が体験し、そこから感じ取り学んでいた。初めての体験でありグリーフケアという難しい場面であっても、家族・介護者と真摯に関わることで学びに繋げることができていたと考えられる。

また、学生のレポートには【訪問看護に求められる知識・技術】【訪問看護に必要な観察・アセスメント力】【意思決定支援】の4つのカテゴリからなる《訪問看護に求められる資質・能力》に関する学生の学びが書かれていた。〈その人なりの正解があるため、対象の利用者を全人的にアセスメントして個別性のある看護を行うことが求められる〉〈訪問時のマナーや言葉遣い、相手を知るために話を傾聴するなど、当たり前であり何気ないことだが信頼関係を得るためにはどういう行動に移すことが大切かを学ぶことができた〉など、訪問看護師の関わりやアドバイスからだけでなく、訪問看護師として備えておく必要があるが現象として見え難くわかり難い資質や能力に関係することも学んでいた。訪問看護師の能力に関する先行研究では、

【利用者の生活場面で看護過程を展開する能力】【利用者の家族との関係を構築する能力】【家族のケア能力を向上させる能力】【多職種との連携による問題解決能力】があげられておりコミュニケーション能力や適切な看護技術を適応する能力の必要性も報告している⁹⁾。学生は訪問看護に求められる能力についても、訪問看護の実習から学ぶことができていたと考えられる。

2. 学生間のディスカッションからの学び

1) 【ディスカッションを通しての多様性の理解と共有】

本学では在宅看護論実習の最終日に、学内での学び発表会、並びに学生間で自己体験から学んだことのディスカッションをする時間を設定している。そこでは学生間で学んだことをリフレクションする場と捉え、見たこと、考えたこと、感じたことを発言し、実践した看護のプロセスをそれぞれが振り返り、自己の看護について語る機会としている。中西¹⁰⁾らはカンファレンスでの自己認知・他者認知の様相は、自分を客観視したり、自分と他者の相違と類似を認めたりする事が出来ることで、成長の自覚につながる高次の意味と言えると述べていることから、実習での成長を実感できる機会であることは教員の狙いと共通している。

学生の記録コードには〈ディスカッションを通して、それぞれの意見の違いや考え方に相違があったが、その分療養者や家族の考え方も様々であることが分かった〉〈自分が疑問に思っていたことの解決に繋がり、今後看護師になった際の新たな視点に繋がって行くと感じた〉〈最終カンファレンスの中で訪問看護師から〔退院したら終わりではなく、患者が自宅に帰ってからが本当のスタートである〕と聞き、療養者に寄り添い、その生活に着目し一緒に考えることが大切であると実感した〉と記されていた。これは療養者の多様性を理解し、学生間でそれぞれに考えたことや実践を共有することで、自己の課題を見出しながら、看護師としての新たな

視点へ視野が広がっていることが伺える。これは他者の経験に身を置き考察する他者理解を通して、自分の考えを整理し自己理解につながる学びが反映されているものと考えられる。そして個々の学生の看護観を育む思考過程の一つとなっているのではないかと推察される。

2)【実習体験からの学びの共有】

筋萎縮性側索硬化症（ALS）の療養者訪問から〈介護者（妻）がとてもきめ細やかな介護をしてお部屋の中もその療養者さんの好きなもの、好きな音楽が流れていて、病人特有のにおいがしない清潔な環境が保たれていた。愛情深い介護を実際に見ることができた。まさに療養者、介護者にとってここが大切な居場所なのだと感じた。〉と記されていた。同行訪問によって、療養者が障害や後遺症を持ちながらも、家族が寄り添い、在宅で療養するその人らしい生き方を実感し〈まさに療養者、介護者にとってここが大切な居場所なのだと感じた〉と、学生は介護する家族の心情を自分の言葉で感情をこめて、心を寄り添うことへの学びを実感し感得したと考えられる。

また、重度心身障害児を訪問した学生は、〈今まで患者さんから〔ありがとう〕という言葉の頂くことでやりがいや達成感を感じていたが、今回は自分の評価を言葉で頂けず分からない状況であった。しかし偶然だったかもしれないが自分が行ったことに、療養児の表情に変化が見えた時があり、言葉だけでの関わりが看護ではないと学ぶことができた〉と記載している。療養児が瞬きや開眼、音に反応し、人に気持ちを伝えているかも知れないと気づき、障害を持っていても、意思表示という計り知れないコミュニケーション能力を持つ可能性に感動していることが伺えた。相手は自分自身に何かを伝えようとしていることを、たとえ理解できなくてもその人、その行為、その意味を理解しようとする心をもって接することが大切であることを学んでいる。そして〈療養者としっかり向き合い、コミュニケーションを取る時間を取り、頑張っ

て療養者の伝えたいことを理解したい、理解できる看護師になりたいと感じた〉との記載から、学生は自分なりの看護観を築く過程に至ったことが推察できる。

小森¹¹⁾は学生がディスカッションや実際に体験した場面に感情移入する事によって、机上の学習による暗黙知から、身体・五感を駆使し共有・共感を獲得する。そして発表会やディスカッション、レポートとして言語化することによって概念化され、客観的に説明できる力、形式知として創造していくと考える、と述べている。学生の体験を通しての看護の語りを受け取る側も、共有し共感することで同様の学びとなり、この過程はひとり一人の学生の看護観を育むことに大きく影響していくのではないかと推察された。

3. 臨地実習による学びの重要性

学生は臨地実習において療養者や家族・介護者と直接関わることで、療養者が何を求めているのか、その人らしさとは何かを実感し感得することができている。言語的・非言語的コミュニケーションができない療養者との関りの中で、少しの変化から相手の気持ちを汲み取る経験は臨地で実習をしなければ学べないことである。また、訪問看護師からの支援を受けながら、学生は様々な環境で看護援助を学ぶ中で、訪問看護師の看護観や死生観、家族看護の語りに触れ、一人のロールモデルとしての学びは計り知れない。このような多くの学びを踏まえ学生間でディスカッションをすることにより、【ディスカッションを通しての多様性の理解と共有】や【実習体験からの学びの共有】ができたのではないかと考えられる。

学生はそれぞれ2～3名ずつ複数の施設で実習を行っており、そこで体験した出来事や学びは様々である。各施設の指導者から頂く指導や助言、専門職としての看護観、療養者への熱い思いに学生は感銘を受ける場面が多々あった。学生間のディスカッションで情報共有はされて

いたが、感動や感銘等の情動的領域には至っていないのではないかと感じる。施設によっては様々な理由から、学びを実感できる経験ができなかった学生もあり、学びの相違は否めない。

今後、更に学びの共有を深める場作りとするためには、教員の関わりや実習方法を検討する必要がある。一つの方法として、オンライン等を活用し、当該の実習施設ではなかった学生もディスカッションに参加したり、訪問看護師の語りをオンライン上でも聴講したりすることで、施設間の相違を補完できる方法も検討していきたいと考える。

4. 今後の課題

現場での様子や直接療養者とお会いすることのない教員は、学生が記録や話をしない限り学びを実感することはできない。中には在宅訪問時に不快な経験をしている学生もいないとは言いきれない。教員は学生と積極的に会話し、学生がどのような場面で何を感じているのか、率直に表現できるように支援することが重要である、そして学生の体験の意味を掘り下げることが教員の役割である^{12) 13)}。学生の気づきや感じたことを言語化できるような働きかけは教員の重要な役割であり、そのために学生の学びを教員も共有できる工夫をさらに検討していく必要がある。

V. 結論

訪問看護実習における学生の学びとして、《療養者への支援》《家族・介護者への支援》《療養環境の整備》《多職種連携》《訪問看護に求められる資質・能力》の5つのコアカテゴリが抽出された。また、学生間のディスカッションからの学びとして、【ディスカッションを通しての多様性の理解と共有】と【実習体験からの学びの共有】の2つのカテゴリが抽出された。

療養者や家族・介護者と直接関わることで療

養者の個別性やその人らしさとは何かを実感し感得できていた。また、様々な環境で看護援助を学ぶ中で、訪問看護師の看護観や死生観、家族看護の語りに触れながら一人のロールモデルとしての学びを得るなど臨地実習でなければできない学びができていた。今回の研究では訪問看護ステーション1施設での学びの検証である。今後は、複数の施設の訪問看護師からの学びが得られる機会をオンライン実習という方法で検討していきたい。

VI. 謝辞

本研究に協力を頂きました学生の皆様に深く感謝いたします。

文献

- 1) 舟島なをみ監修：看護学教育における授業展開 質の高い義・演習・実習の実現に向けて、第2版。医学書院、東京。pp. 205, 2020.
- 2) 文部科学省・厚生労働省。新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和2年2月28日付け事務連絡）。https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（閲覧：2024年9月27日）
- 3) 福田久子，峯小百合，瀬瀬祐子・他：在宅看護論実習におけるオンラインによるLive実習の試みー訪問看護についての学びの分析ー。日本医学看護学教育学会。31（4）：57-64，2023.
- 4) 大西信行，松田陽子，萩典子：オンラインによる精神看護学実習 オンラインを活用した入院患者とデイケア利用者とのコミュニケーションの試み。日本精神科看護学術集会誌。64（2）：121-125，2021.
- 5) 萩原智子：新型コロナウイルス感染症

- (COVID-19) 禍における成人看護学実習 (慢性期) の展開—オンライン実習の構築と実践報告—. JUOEH (産業医科大学雑誌). 44 (1) : 91-100, 2022.
- 6) 川上祐子, 中村康則, 任和子・他: 在宅看護実習における看護実践能力の修得状況—計量テキスト分析による検討—. 人間科学研究. 32 (2) : 157-169, 2019.
- 7) 國丸周平, 新井香奈子: 訪問看護師の実習指導における「取り組み方」に関する文献検討. 日本在宅ケア学会誌. 27 (2) : 56-63, 2024.
- 8) 大谷かがり, 寺本由美子, 小塩泰代・他: 在宅看護における家族看護とは—在宅看護実習の学生の学びを分析して—. 第50回日本看護学会論文集 在宅看護. 87-90, 2020.
- 9) 王麗華, 木内妙子, 小林亜由美・他: 在宅看護現場において求められる訪問看護師の能力. 群馬パース大学紀要. 6:91-99, 2008.
- 10) 中西純子, 岡田ルリ子, 塩月ぬい子・他: 学生にとって意味のあるカンファレンスとその関連要因—. 愛媛県立医療技術大学紀要. 2:21-27, 2005.
- 11) 小森直美, 藤岡あゆみ, 小路ますみ: 看護学生の感動体験の考察と, その思考過程検討—在宅看護実習後のレポートから—. 福岡県立大学看護学研究紀要. 6 (1) : 48-55, 2008.
- 12) 三橋美和, 田中陽子, 堀井節子・他: 在宅看護実習の評価と課題—医学部看護学科1期生の実習評価. 京都医科大学看護専門学校紀要. 16:39-46, 2007.
- 13) 豊島泰子, 山崎律子: 在宅看護論実習内容の検討—学生の自己評価記録の分析より—. 聖マリア学院紀要. 19:93-96, 2004.

Report

Analysis of learning about home-visit nursing in clinical home care nursing practice

Hisako FUKUDA, Miki FUJISAKU, Sayuri MINE

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tsukuba International University

Abstract

The purpose of this study was to clarify students' learning about home-visit nursing from their reports after completing the clinical practice and to obtain suggestions for future practice systems. An analysis of the contexts related to learning about home-visit nursing was conducted based on the post-practice reports of 45 fourth-year students who completed the home care nursing practice.

Five core categories were extracted regarding learning from home-visit nursing: [Support for patients receiving care], [Support for families and caregivers], [Preparation and maintenance of the care environment], [Interprofessional collaboration], and [Qualities and competencies required for home-visit nursing]. Additionally, two categories of learning were identified from student discussions: "Understanding and sharing diversity through discussions", and "Sharing learning experiences from the practice".

Students were able to perceive and deeply understand the individuality and unique characteristics of patients by engaging with both the patients and their families or caregivers. They also developed their own perspectives on nursing by learning from the support provided by home-visit nurses and sharing their experiences through discussions.

Keywords: home care nursing practice, clinical practice, home-visit nursing, student learning